

大原薬品工業（社長大原誠司氏）は、1957年に甲賀製薬共栄社として創業、64年に法人化し現社名に改めると共に原料医薬品の製造を開始し、72年に現在地に移転して新開発医薬品の研究開発強化を図った。その後79年に工場の近代化を図り、GMP対応工場が完成、医療用医薬品部門に進出。ネットワーク型企業を追求し、戦略的アライアンスとして、2000年8月に伊藤忠テクノケミカル、稲畑産業、CBCの3社と資本提携を行い、Private Company から Public Company へ飛躍を図った。

この資本提携により大原の技術・製造能力・国内営業基盤と、商社の世界的なネットワーク・情報力・資本力との一体化が図られ、

大原薬品工業、東京支店拡大、新設工場滋賀

大原薬品工業



大原社長

これまで以上に高品質かつ信頼性の高い医薬品を安定的に

更に安定した経営基盤を構築したのを機に01年からの第1次3カ年計画を策定。事業構造の選択と集中を図り、特に医療用医薬品事業に特化して拡大を図ったことにより、3年間の伸び率が148・7%（28億円から42億円）と業界でもトップクラスの成長率を達成した。現在、第2次3カ年計画の初年度であり、本年度で神工場への投資がほぼ完了し、60億円規模の生産高を確保できることになった。

供給できるようになり、大原の対応力を理解する医療機関がかなり増えた。安定供給の阻害要因の50%は原薬に起因していると言われているが、同社の原薬製造力がその問題をクリアしている。

03年度の売り上げは前期比21・1%増の41億円余で、研究開発面では、大手

安全性組織機能を強化

との共同研究もあり、来年度はAPI2品目と製剤7成分12品目の上市を予定している。製品開発重視型企業・キャッシュフロー経営・成果主義を基本戦略として、第2次中期経営計画において、「大原1556」おいては、固形剤の開発と銘打って、品質ナンバール1、研究開発競争力（ジェネリックメーカー）

力5位以内、経常利益5億円以上、売上高60億円以上の達成）を掲げている。

一方、製造力という点に関しては、医療機器メーカーであるガンプロの甲賀工場の購入が実現し、12月1日から滋賀工場として稼働できる見込みとなった。新工場はバイエル薬品滋賀工場の隣で、敷地4万600

も対応できる体制を構築する予定である。

これにより、現本社は登記所在地として残すが、基本的に開発と生産に特化する。一方、東京支店を移転拡大して規模を倍増させ、業務拡大と薬事法改正に対応する。営業機能や学術部門を倍増させ、安全性部門の組織機能の強化を図り、セキュリティ機能をアップさせ、原則的に東京で対応することとしている。

同社は制度改革を睨んで体制の整備を進めることが経営課題であるが、少量多品種の製造が可能であり原薬部もあることから、エッセンシャルドラッグの供給、つまり新薬で医療上必要なものについてもきっちり提供し、品質基準や品質保証体制など同社の情報提供の根拠を整備して、ジェネリックを含めて医療に貢献していく。

甲賀発

躍進するジェネリックメーカー